

教養としてのライフスキル

報告者

関口 久志（京都教育大学 教育支援センター長／教授）

北山 敏和（ライフスキル講師（フリーランス））

コーディネーター

安江 勉（京都教育大学 教育学部 准教授）

参加人数

25名

現代を生きる私たちに必要なライフスキル、生きるための能力は何か。世界保健機関（WHO）は「日常の様々な要求に対し、より建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」と定義している。

ここでは、大学教育、生活のなかで多様な問題をかかえている今の学生にとって、重要なライフスキルは何か。大学での実践報告、ワークショップを通して語り合う機会としたい。

〈第 15 分科会〉

教養としてのライフスキル

分科会のねらい

現代を生きる私たちに必要なライフスキル、生きる能力は何か。世界保健機関（WHO）は『日常の様々な要求に対し、より建設的かつ効果的に対処するために必要な能力』と定義している。そして、ライフスキルの10項目に「1. 意思決定 2. 問題解決 3. 創造的思考 4. 批判的思考 5. 効果的コミュニケーション 6. 対人関係の構築と維持 7. 自己認識 8. 共感性 9. 情動への対処 10. ストレスへの対処」を挙げている。この分科会は、様々な問題を抱えている現代を生きる人、学生にとって重要なライフスキルは何か。大学での実践報告、ワークショップを通して語り合う機会としたい。

発表及び報告、ワークショップの概要

第一発表：関口久志氏「現代課題からみた教員養成におけるライフスキル教育の必要性」

京都教育大学のライフスキル教育は、若者が個性ある自己と他者を尊重し、社会の一員として責任ある行動がとれるよう、肯定的な集団づくり、自己規律・自己責任・自信などの形成、他者とのコミュニケーション能力、問題解決能力、目標設定と計画、批判的思考力を向上させることを目的としている。また、教員志望学生が自身のライフスキルを高める機会だけでなく、教師としてライフスキルを指導する力をつけるという二重の意味があると考えている。

受講生報告：福永佳奈氏「ライフスキル教育の実施と内容」

ライフスキル教育を受講して、悩むことから自分なりの答えを導き出していると分かり、自分の生き方に自信を持つことができた。また、生徒をまとめる力、子どもや親とのコミュニケーションの取り方など、普段の授業では学べない教員にとって必要な力が身についた。そして、自分につけたい力と子どもに身につけさせたい力、それがライフスキルであることを理解したことで、ライフスキル教育を教師になったときに授業に取り入れ、子どもたちの充実した生活を送る手助けになりたいと考えるようになった。

第二発表：北山敏和氏「ライフスキルを基礎にした教育とその学習例」

教員志望学生の課題は、専門的な知識の欠如ではなく、自己をコントロールする力や意思決定能力、コミュニケーションなどの対人関係能力など、ライフスキルに関わっている。ここでは、将来の授業モデルになるアクティブ・ラーニングを通して、教員としての自立を支援するライフスキル教育の一端を紹介したい。

ワークショップ1

受講者ひとりひとりに、縦10cm×横20cm位のカード1枚とマーカー1本を配布する。『小学校5年生の嫌いな野菜』を小学校5年生になったつもりで、他の人に見やすいように、大きく、きれいにカードに書く。「ピーマン」「人参」「ゴーヤ」「きゅうり」「ごぼう」など、書いたカードを床の上に置く、同じ種類の野菜は続けて並べていく。そうすることで、一目瞭然、情報を共有することができる。

もうひとつ、『最近の子どもに足りない力』をカードに書き、床に置く。「自信」「向上心」「創造性」「忍耐力」「積極性」「客観的思考」など。同じ意見は続



けて並べる。視覚的に全員の意見、発表が聞ける。

ワークショップ2

聞き方、伝え方の実習。3人1組のグループになり、それぞれの役割分担として、司会、聞き手、記録係を決める。司会『あなたの夢、これからやってみたいことは何ですか』『そのために今なにをしていますか』と聞く。聞き手はそれに応える。記録係は2人を観察して気づいたこと、感じたことを記録する。3回それぞれの役割で練習する。終了後、話を聞くとときに大切なポイントを3人で話し合い、代表の者が発表する。各グループから「話を途中で遮らない」「最後まで聞く」「否定をしない」「頷きながら聞く」「相手の意図を理解する」「リズムをこわさない」「適宜に質問やコメントをする」など。

もうひとつ、3人1組のグループのなかで、話し手、聞き手、時間・コメント係を決める。話し手『1分間の自己紹介』をする。聞き手は自己紹介を聞く。時間・コメント係は2人を見て感じたことを話す。3回それぞれの役割を練習する。終了後、話を聞くときの大切なこととして「興味を示す」「相手の眼を見て相槌をする」「最後まで聞く」「他のことをしない」「話に応じた表情をする」などの意見があった。

ワークショップ3

4人1組のグループに分かれ、司会、記録係、発表係、コメント係を決める。そして、『アクティブ・ラーニングとは何か』を各グループで話し合い、画用紙に文字や図で表現したものを発表係がプレゼンテーションする。それを受けて、他のグループのコメント係が感想や意見を話す。

アクティブ・ラーニングの重要項目として「積極的、主体的、能動的な活動への仕組みづくり」「コミュニケーション、ディスカッション、プレゼンテーション能力の習得」「教室内外での体験、発見」「想像力の育成」など。課題として「教室環境の整備」「指導者及び学生の実力」「意欲、好奇心の欠如」などの指摘があった。

ワークショップ後の感想（抜粋）

- ・よい刺激になり、やる気スイッチを入れようと思った。
- ・学生課の職員としてコミュニケーションの勉強になった。
- ・学生である自分と教育者としての自分に必要なことを学べた。
- ・講義とワークショップ、両方経験できてよかった。
- ・アクティブ・ラーニングを経済学部にもどのように取り入れるか、参考になった。
- ・生活のなかで行動する力を養うヒントを得た。
- ・大学に帰ってアクティブ・ラーニングを授業に取り入れたいと考えた。
- ・学生との関わり、保護者との相談に活かせる内容を勉強したと思う。

京都教育大学 准教授 安江 勉



現代課題からみた教員養成におけるライフスキル教育の必要性

京都教育大学 教育支援センター長／教授 関口 久志

第22回FDフォーラム

「現代的課題からみた教員養成におけるライフスキル教育の必要性」 ～京都教育大学の取り組み～

京都教育大学 関口久志

取り組み課程

H21年度教育研究改革改善プロジェクト「教師力を高めるライフスキル教育の可能性を探る」
H22年度教育研究改革改善プロジェクト「教員養成におけるライフスキル教育の導入と評価」を経て、
H23年度から教育学部教育課程の自由科目「ライフスキル」設置
H27年度より、授業「ライフスキル教育」が自由科目から教養科目（人間形成科目群）として選択必修に昇格
H22年度より、同時に、教職キャリア支援としてワークショップ（2日間集中講座）を年に一度、2月末～3月初めに継続実施
ライオンズクラブからの講師派遣等の支援を受けている



第15分科会

ライフスキル教育について 二重の意味

日常生活での活用

若者が個性ある自己と他者を尊重し、社会の一員として責任ある行動が取れるよう、肯定的な集団づくり、自己規律・責任感・自信などの形成、他者とのコミュニケーション能力、問題解決能力、目標設定と計画、批判的思考力などの能力を向上させることを目的とする

教員養成での活用

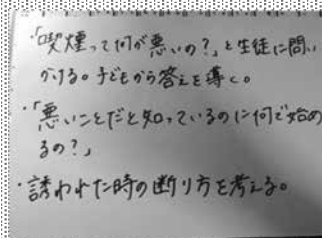
教員養成段階におけるライフスキル教育は、教員希望学生が自身のライフスキルを高める機会だけでなく、教師として生徒達にライフスキルを指導する力量を育てる力をつける



○日常生活課題

現代の若者には薬物、アルコール、ネット依存や性暴力などへの理解段階に留まり、抑止行動力が十分育っていないのではないかと懸念

その解決のためには、諸問題を学習して理解するだけではなく、自身での確かな判断をし、自律的な意志決定を行い、学んだ力、身に付けた力を社会生活の中で、確実に行使できる行動能力を高める学習（アクティブラーニング）が、より強く求められる



例：セクシュアリティ教育に活用

「好きな相手から性的誘い」→「まだ自立できず責任とれないからダメ」
効果的な断り方 ベストアンサー



「あなたが好きだよ、そんな相手はあなたしかいないと思っているよ、でも今はまだ、もっと将来の方が心配もなくてもっと幸せに感じて、もっとあなたのことを好きになれる。それまで待ってくれる、そんなあなただから大好きで大切にされていると思う！！
そのかわりに、二人で映画みて、おいしいものを食べようよ」

セクシュアリティ授業 印象感想

「私はしないほうが良い理由を考えていたが、他の人の発表を見てみると、好きだからこそ大事にしてという言葉が多くあり、自分も相手も傷つせず、より相手に好意を持ってもらえるようなものですごいと感心しました。してはいけない行動に対して「ダメ」といった言葉で教えられることが多い中、実際その立場になったときを教えることはものすごく重要なことだと感じました」

「学校では性交渉は「するな」「やるな」と指導された記憶がある。しかし、今回の授業のように会話形式で明るく指導していくことはとても大切で、記憶に残りやすいと感じた」

「高校で今回のように断るときのセリフを考えるというのは、やったことがありませんが、その時はたばこやお酒だけで性行為についてはやらなかったで、勉強になりました」

○教師力向上 文部省1010年調査全国校長4千人
「新任の教員に足りないもの」は「
「集団指導の力」「学級づくり」65%～70%と最多
○教員志望学生の不安も同じ傾向
「生徒指導、保護者との関わり、経験不足であることもあって、
どうしてもいいのかわからない。児童や保護者の方にきちんと受け入れてもらえるかが不安」
「保護者との関係をうまく構築することに対しては不安に思っています。保護者からの要望やクレームにきちんと対応する力が自分には今は無いと感じている」

「ライフスキル教育」とは、若者が個性ある自己と他者を尊重し、
社会の一員として責任ある行動が取れるよう、肯定的な集団づくり、
自己規律・責任感・自信などの形成、他者とのコミュニケーション
能力、問題解決能力、目標設定と計画、批判的思考力などの能力を
向上させる
知識と行動をつなぐスキルの教育として、教員としての基礎的な
資質を向上させる。近年の様々な教育問題を発端として、児童・生
徒への教育としても広く実践されるようになっており、「ライフス
キル教育」を指導できる教員の養成という観点から重要



教職に役立つと思う 受講生感想

- ・人間関係、人付き合いなど
- ・授業中の指示の出し方や、手が挙がりにくいときにどうすればよいのかを活かしてみたい
- ・一人ひとりの意見を尊重すること、また、そのような雰囲気作り
- ・仲間作り、日常の問題に直面したときの解決方法
- ・良い集団作りをするために必要なことや、ライフスキルで実際に班やグループで行動する際に子どもたちを・・・?
- ・特別支援の場合、自立活動の一つとして使えそうだった。日々のHのちょっとした時間にやるのも面白いと思いました。
- ・学級活動や道徳の授業に取り入れることが出来る
- ・年間の学級経営はもちろんだが、クラス始め(4月)に学級を形成するときに良好な学級を作る第一歩になると思った。
- ・子どもの自主性を高めたり個人のより良い生き方に役立ちそうです。

シラバスより授業の概要

- (1) 他者と良い関係を結ぶためのコミュニケーションと対人関係能力、よりよい選択や決定を行うための意思決定や問題解決能力、感情を受け止め、自尊感情や自信を育てる自己コントロール能力など、学力とは異なる生活の中で行動する力(ライフスキル)について理解する
- (2) ライフスキル教育を通して子どもの個人的、あるいは対人関係の諸問題への適切対応能力を育てる方法を実践的に理解する
- (3) 同僚との協働、保護者対応など、教員に求められる資質能力の向上を図るため、教職に必要なライフスキルについて学ぶ

授業では、あなたが期待したことを達成することができましたか？

- ① 十分達成できた・・・13名
- ② まあまあ達成できた・・・16名
- ③ どちらとも言えない・・・0名
- ④ あまり達成できなかった・・・0名
- ⑤ 全く達成できなかった・・・0名

今回のワークショップ(集中)では、あなたが期待したことを達成することができましたか？

- ① 十分達成できた・・・9名
- ② まあまあ達成できた・・・7名
- ③ どちらとも言えない・・・0名
- ④ あまり達成できなかった・・・0名
- ⑤ 全く達成できなかった・・・0名

代表的感想:この授業を受けていない人がかおれ、そうすごくと願います。それほど、この授業は教員になる軌道に必要な力を養ってくれる重要な授業でした。先生先生のやられる他の特別授業も是非参加したいです！

大学の大きな課題:教室の問題 人数
講義型 口の字型 WS型 自在に使える



ライフスキルを基礎にした教育とその学習例

ライフスキル講師（フリーランス） 北山 敏和

私たちは、頭の中で考えたことを必ずしも即行動としてうまく実行できるわけではない。例えば他者と良い関係を結びたい、目標を立て計画的に取り組みたい、困難な課題に直面してもへこたれずそれを乗り越え前に進みたいと考えても、実際には出来ないことが少なくない。つまり「～したい」という意思(will)に加えて、それを行動として実行する能力(skill)が必要なのだ。

多くの教員養成課程の学生は、教員となった将来の自分の姿を思い描き希望に燃えている。一方、児童生徒たちをうまくコントロールできるか、保護者と相互理解や協力関係を結べるか、同僚の教員と前向きの協働関係を構築できるかについては、大きな不安を抱えている。

そこで、『ライフスキル教育』をテーマの学習を通して、その不安が実は専門的知識(=academic skills)の欠如ではなく、学生自身の自己コントロールや意思決定能力、そしてコミュニケーションなどの対人関係能力(=Life skills)に関わっていることを確認し、将来の自分自身の授業モデルにもなる“アクティブ・ラーニング”を通してそれらの能力を習得し、教員としての自立／自律を支援する試みの一端を紹介したい。

